

Title	現代世界學としての日本學の根本理念
Author(s)	石川, 興二
Citation	經濟論叢 (1941), 53(3): 249-263
Issue Date	1941-09
URL	http://dx.doi.org/10.14989/131594
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷三十五第

月九年六十和昭

論 叢

現代世界學としての日本學の根本理念……………經濟學博士 石川興二

支那の田賦整理……………經濟學博士 八木芳之助

企業原理と企業規模……………經濟學士 大塚一朗

資金調整の課題……………經濟學士 中谷實

ロバートソンの四つの係數の理論……………經濟學士 青山秀夫

研 究

經濟社會學の基本概念……………經濟學士 北野熊喜男

古代猶太共同體の成立……………經濟學士 澤崎堅造

說 苑

ボオル・ベルナルの佛印工業化論……………經濟學博士 松岡孝兒

附 錄

彙 報

外國雜誌論題

經濟論叢

第五十三卷 第參號 （通算第參百拾五號） 昭和十六年九月發行

論叢

現代世界學としての日本學の根本理念

石川 興 二

一 現代世界學の根本課題

今や人類世界は未曾有の混亂に陥つて居る。嘗て有産者階級を主體とすることによつて自己の國內に資本主義的體制を形成し、同様に世界資本主義體制を建設した英國は、その日没するところなき大英帝國の保持に専ら努めつゝある。これに對し獨逸は權力階級を主體とすることによつて國內の全體主義的體制を爲し遂げ、今や同様の體制を世界的に擴大し、獨逸民族を主體とする世界の全體主義體制を完成せんとしつゝある。これに對し露西亞は無産者階級を主體とし一國社會主義の主張によつて社會主義體制を國內に爲し遂げ、今や進んで露西亞を主體とする第三インターナショナルによつて世界社會主義體制の構成を進めんとしてゐる。かくの如く各々が自己を主體とする世界秩序を主張する三國は、今や當然に第二次世界大戰に陥らざるを得なかつた。この戰の進むに

つれて世界の他の國々は次第にその何れかの陣營に分屬することにより今や世界は未曾有の對立混亂に陥りつゝあるのである。

かくの如く現代世界の混亂は、世界の部分が各々自己を主體として世界秩序を確立せんとする意味に於て部分的主體制の世界的對立であるが、このことは同時に各國の内部に於て同様な對立を激化する。即ちそこには資本主義、全體主義、社會主義の對立抗争が見られるのであるが、この國內に於ける對立は更に國際間に於ける對立を激化する。

而もこれ等の立場の何れが勝つて世界の新體制を實現したとするも、それは部分的主體性の秩序である故に其他のものはこの部分的主體性に對する從屬的地位に立たざるを得ないのである。この點に於てこれまで英國を最高の主體とせしところの世界資本主義秩序と異なるところがない。故に世界は本質的に安定せるものではなく、やがて被支配的地位にある他の部分が、支配的地位にあるものに對して反抗し來るべきこと今日と同様である。かくして國際間の鬭争は誠に所謂惡無限 *die schlechte Unendlichkeit* ならざるを得ない。而も發明、發見、生産力の進むにつれて戦争は愈々その破壊力を増進する。このことは第一次世界戦争と第二次世界戦争とを比較すれば極めて顯著である。即ち第二次世界大戰に至つてはじめて武器は完全に機械化された。この機械的裝備は更に各國の競争によつて絶へず押し進められて行く。この爲めには各國は互にその生産力と發明發見とを盡して平時より常にこれに當つて居なければならぬ。若し平時これを怠れば戰の始まりし時に至つてこれを補ひ得ず、従つて勝敗は既に決定的となることは、今次の戦争に於ける獨逸の勝利と佛蘭西の敗北との關係に於て最も顯著に見られるのである。而も第一次大戰と第二次大戰との二十年間に於て實現せし武器の飛躍的發展は今後益々その

速度を早めるが故に各國が軍備競争に傾注しなければならぬ努力は愈々大とならざるを得ないのであり、この爲めに平時も全く戰時的状態となり國民生活の一切を戰備の爲めに犠牲とせざるを得ざるに至る。かくして今後の人類世界に於てはこの支配者が被支配者を壓迫する爲めの、また被支配者が支配者に抗争する爲めの平時よりの軍備の努力と一度戦がはじまつた時の慘劇とは遂に人類を自滅に至らしめざるを得ざる勢にある。

かくて人類の生きる道は今やこの現代世界を掩ふて居る無限の闘争と混亂を根本的に止揚して眞に人類共和の世界秩序を齎らすより外ないのである。この眞の秩序の實現こそ現代人類にとつての根本課題であつて、この根本課題を解決し得るものこそ現代の世界學である。然らば如何なる學がこれに眞に答へ得るであらうか。

二 日本學の根本理念としての「こゝ」

一國民の人文學が確立するが爲めには、それが基本概念たるものが必要である。

英國の人文學が *society* なるものを根本理念として確立發展したるが如く、獨逸の人文學は *Staat* を根本理念として確立發展した。かくて英國に於ては *social philosophy* 社會哲學が發展しこの上に *social science* 社會科學が發展したのに對して、ドイツに於ては *Staatsphilosophie* 國權哲學が確立しこの上に *Staatswissenschaft* 國權科學が發展した。これを經濟學のみについて見るも、スミス、ベンサム等の社會哲學の上に立つて社會經濟學として英國の正統學派が發展したに對し、ヘーゲル等によつて確立されたところの國權哲學¹⁾の上に國家權力の立場よりの經濟學としてアダム・ミューラー、新舊歴史派等の獨逸經濟學は發展したのである。要するに英國の學問は社會の面より人間的存在を明にしたるに對して獨逸の學は國權の立場より人間的存在を明にし以て共に人類の人文

1) Hegel は *Rechtsphilosophie* の序文に於てこれを *Staatsphilosophie* として述べて居る。

學の進歩に貢獻したのである。

かくの如く一國民の人文學なるものが成立つ爲めには、その學の根本理念なるものがあつて、これが未だ十分に解明せられざりし人間的存在の面を明にし以て人生の高揚發展に貢獻したのである。

而も各國民が人類全般の人文學の課題に貢獻するところの面は、それぞれの國民が正にそれを得意とする面に於てである。例へば英國が社會の面に於てこれを解明し得たのは、その國民的存在が社會の面に於て發展して居たが故である。また獨逸がこれを國權の面に於て解決し得たのは、その國民生活がこの面に於て發展して居たが故である。

同様に日本の人文學なるものが確立するが爲めには、先づその根本理念とするところのものがなければならぬ。而してこれが人間的存在の未だ解明されざる面の解明に貢獻するところのものでなければならぬ。而もかくの如き人間的存在の面は日本の國民的存在に於て特に發展して居るところの面でなければならない。かゝる面は何であらうか。

日本人は人間の最も具體的な有り方を「いへ」として考へる。即ち日本人は「家庭」を特に重んずる國民であるが、更に國を「いへ」として考へる。これが「國家」である。この日本國民は更に世界の最も具體的な有り方を「いへ」として考へる。「掩八紘爲宇」即ち「世界を宇と爲し」と云ふことが日本の世界的理想として歌ふて居るところのものである。かくて獨逸人が *Staat* の構造を英國人が *society* の構造を世界にまで徹底せんとするが如く「いへ」を以て最も具體的な人間的存在の有り方となし、これを家庭、國家、世界にまで徹底し具現せんとするところのものが、日本人の人生觀である。かくて日本語の「いへ」なるものは、獨逸語の *Familie* 英語の

Family 等よりも、更に廣い意味を有するものである。この「いへ」こそが、日本學の根本理念となるべきところのものである。而もかく深く日本人の生活觀と結ばつてゐる「いへ」なるものは未だ十分に哲學的並に科學的自覺に高められて居ない。これを十分なる自覺に高め「いへ」の哲學並に「いへ」の科學を確立し發展することが即ち日本學を確立し以て世界の人文學に日本が貢獻する所以である。

而もこの「いへ」なるものを哲學的並に科學的に明にすることは、單に人間的存在の未だ明にされなかつた一面を明にすると云ふのみならず、現代世界に對して大なる實踐的意義を有するのである。

即ちこれまで歐米の學が明にしたところの society も State も何れも部分的主體性¹⁾の存在である。即ち State は權力階級が主體的地位に立つて他の總てのものを被支配的地位に置くところのものである。また society は個々人を主體とし轉じて有産者階級が主體となつて他がこれに支配される資本主義體制となり、また無産者階級が主體的地位に立ち他がこれに支配されるところの社會主義體制となるところのものである。¹⁾これ等のものにあつては人間的存在の一部が主體的地位に立ち他のものはこれに對する被支配的地位に立つのである。かゝる人間的存在に於ては、支配者階級と被支配者階級との對立抗爭が本質的に含まれてゐるが故に「人類社會の歴史は階級鬭争の歴史なり」と云ふことが國際的並に國內的事實たらざるを得ない。現代世界の混亂も即ち是である。

然るにかくの如き部分的主體の對立なるものは實はこの對立を越へたところのものに於て可能である。これまでの哲學並に科學は、階級體制はこれを解明し得たるも、この階級對立を越へ階級對立を可能ならしめて居るところのものは、これを明にし得なかつたのである。このものこそ日本の「いへ」によつて明にさるべきところのものである。故に日本學は人間的存在の新たな面を明にすると云ふのみではなく、これまで明にされたところのも

1) 拙著『新體制の指導原理』第14頁以下參照。

の、根底を明にすることによつてこれまでの學的研究の成果を高めることとなる。即ち Staat 並に society は、「いへ」を根底としてはじめて十分に明になるのである。従つてこれ等に關する哲學並に科學は「いへ」の哲學並に科學を待つてはじめて十分なものとなるのである。これを經濟學について云へば、所謂社會經濟學並に國權經濟學は「いへ」の經濟學を待つてはじめて十分なものとなり得るのである。

かくの如く「いへ」なるものは社會並に國家の根底としてこれ等を明にするのみならず更に進んでこれ等のものゝ對立を止揚するところのものである。即ちこれまでの對立混亂は、階級體制に於ける階級間の對立抗爭であり、また部分的主體相互の對立抗爭であつた。然るに「いへ」なるものはこの對立の根底にあるものであり、この對立を止揚し得るところのものなのである。

かくて部分的主體の對立が世界的規模に於て展開して居るところ現代世界の對立混亂を止揚し以て人類をその自滅の方向より救ふところのものは、この「いへ」を根本理念とする日本學より外にあり得ないのである。嘗て英國の「社會」の學が中世より近世への轉換期に於て人類を權力的壓迫より解放すると云ふ人類の世界的課題を解決したる點に於て世界學としての意義を有したが如く、「いへ」を根本理念とする日本學は、正に現代の人類世界の課題を解決し得るところのものとして同時に現代の世界學としての意義を有するのである。

三 階級的存在と「いへ」

抑も對立なるものの根底には統一が存在して居るのである。即ち支配階級と被支配者階級との對立の根底には「いへ」即ち共同體があるのである。そこに於て各々の部分が全體より生かされ部分が全體に盡すところの緊密な

共同體即ち「いへ」¹⁾の關係があればこそ部分と部分との對立があり得るのである。かゝる意味に於て階級的對立的關係の反面には必ず共同體的な關係がある。これを例へて云へば、中世の封建社會を構成せしところのその主體としての武士階級と一般的民衆たる産業階級とは、支配者階級と被支配者階級としての對立に立てるものであるが、而も武士階級の力によつて國土の治安が維持されるが故に産業階級は安んじて産業に従事し得るのであつて然らずんば不可能である。また産業階級が産業を營んで武士階級の必要とするものを與へるが故に武士階級は存立した活動することが出来るのである。即ちこの兩者はその職分を以て各々が全體に盡すところのものでありまた全體より生かされてその職分を遂行し得るところのものである。換言せば兩者は一つの國家にあつて、各々が國家の働きを分擔して以て自己の職分となして居るのであつて、この各々による職分の遂行によつて國家の治安維持が保もたれ産業的活動が營まれて國家が存立發展し得るのである。この國家に於て兩階級が存立して職分を遂行し得るのである。かくして各々は一つの國家にあつてこの國家より生かされ國家に盡すところの共同體的關係に置かれて居るのである。

然らばこの一つの「いへ」の働きが何故にかくの如く階級的對立的關係に立つに至るであらうか。それはこの職分が各々に全く固定化するに至るが故である。然らば何故に固定化するであらうか。これこの職分が家族により擔當されるからである。即ち武士なる職分は、武士たる職分を負へる人の死によつて斷絶するものでなく、それはまた子々孫々につたへられるのである。即ち「血の家」がこれを擔ふことによつてこの職分がその家に傳はるのである。かくて武人の家に生れたところのものは代々武士となり、然らざるものは武士となり得ないのである。このことは封建的社會制度が確立すると共に固定化するのである。かくて支配者階級は代々支配者階級である

1) 「いへ」即ち共同體の概念はこれを個人主義並に全體主義に對して明にせり、拙著『新體制の指導原理』第25頁以下參照

が、然らざるものは代々被支配者階級とならざるを得ない。

かくして一つの國家即ち國を單位とせる「いへ」に於てその働きが「血の家」の職分となる時こゝに階級社會が成立するのである。

近世社會に於ける資本家階級と勞働者階級についても同様である。この兩階級の存立は一つの國家に於てこの國家の職分を擔當するところのものである。即ち近世國家の生産の特色は大なる生産設備による生産であるが、資本家階級は、本來この生産設備を保有し發展せしむるところのものととして成立つ。これに對し勞働者階級は、勞働を供給するところのものである。この生産手段と勞働が結びつてはじめて生産が實現するのである。この意味に於て兩者は共に一つの國家の生産的な働きを分擔するところのものである。而もこれが兩者相俟つてその力を發揮し他方が發達する程一方がまたその働を増し得るところの緊密一體的なものである。而もこの二つのものが相反撥する所以のものは、その職分が血の家を「*tribe*」として血の家に固定化するが故である。近代社會を個人主義社會と呼んだ。それは個人を主體とする社會の意である。若しかくの如くに個人が主體であるとすれば、その職分はその個人の死と共に移るが故に階級化することはあり得ない。然るに事實上に於てこの職分を擔當するところのものは個人ではなくその個人を成員とするところの「血の家」であつて、生産手段は代々にへられるのである。これを勞働者階級について見れば、この市民社會に於ては一切のものは教育に至るまで金に代へて與へられるのである。故に金なき家に生れたものは教育も受け得ず結局は代々勞働者として自己の勞働を賣るより外なきこととなるのである。かくして一國家の生産的職分は、それが血の「いへ」に擔はれることによつて階級對立的となり得るのである。

然らばこれ等一國家の職分がかく階級化すと云ふことは必要であらうか。未だ教育制度が社會的又は國家的に完備せざる限りその業を家業とすることによつてその職分の維持を計り得る。これ教育の社會的並に國家的な設備が十分發展せざる限り、教育の主要なる主體は「血の家」なるが故である。即ちその家に生れたものは幼少よりその環境にあつてその職に習熟することを得るのである。かくの如き習得はこれを血の家以外に俟つことは出來ないのである。かくして自己の家の職でないところの一つの職を習得せんとするところのものはその職を業とする家に弟子入りすることが必要となつたのである。中世の徒弟制度なるものはかゝる意味に發するところのものである。

この點に於ては近世社會の階級なるものはその意味が甚だ異なることとなる。これ學校教育なるものが人に發達してこれまで家庭に於てのみ學び得たる職も學校に於て十分にこれを習得し得るに至れるが故である。而して高度の職ほどこのことが大となつたのである。然るに無產者が階級的運命に止まらなければならぬ所以のものは、この學校教育自體が金あるものにのみ與へられ金なきものには與へられないが故である。かくして近世社會に於ける階級なるものは、本質的に有產者階級と無產者階級との別となりその間の對立抗争となるのである。かくて今やこの有產者無產者の階級的對立は止揚されなければならないものとなつたのである。國際間に於ける部分的主體性の對立についても同様である。

要するに階級的對立の根底に共同體のあることを自覺した時、はじめてこれを止揚し得るのであるが、これまでの歐米の學は、十分意識しなかつたが故に反對に階級的對立抗争を激發するに役立つたのである。「いへ」を根本理念とする日本學がこの「いへ」の自覺を深める時はじめてこれを止揚し得るのである。

以上階級的存在の根底に見たこの「いへ」について更にその自覺を一般的に展開することとする。

四 人間的存在の世界共同體の本質

人間的存在は本質上共同體である。これ人間的生命が本質上共同體的なるものなるが故である。即ち人間的生命の働きは知、情、意に區別されるがその根本を爲すものは、情である。人間が知識に於て知ると云ふことも、情に於ける關心に基いて知るのである。例へば柿の實を認識すると云ふことについて云ふも、食後の散歩の時にはこれを赤くて美しいものとして藝術的に見るであらうが、山より餓ゑて下り來た時には食べられるものとして實用的に見るであらう。總て物は多面的なものであるが、人間はこれを何れかの面より認識するのであつて、その面は情に於ける關心に於て決定されるのである。かくの如く知識に於て知ると云ふことも根本に於て情の働きの決定されてゐるのであるが、意志に於て目的を定めこの目的を實現すべき方策を立てて行動に移ると云ふこともその根本は情の働きの基いてゐる。例へば市民階級を是とするか不可とするかによつてこれを保持し又は變革すべき目的並に方策を立てこれを行動に移すのであるが、この價值判斷は情の働きの於て成立するのである。かくて人間的生命の根本であり中心であるところのものは情である。

かくの如く情を本質とするところの人間なるものは、それが生活を共にすればその間に自ら共同感情を生ずるのである。このことは親子兄弟の所謂肉親の間に於てのみではない。本來仇敵の間にあるものと雖も久しく生活を共にすれば、その間に愛が生じ得るのである。『恩仇の彼方』¹⁾に於て物語られてゐるところのものは即ちこれである。個人主義社會と云はれるものに於ける買手と賣手との關係も、それが久しく行はれてゐる中には、そこに

1) 菊池寛著

情緒的な關係が生じてくるのである。かくして人々が生活を共にする以上、至るところその間に共同感情が生ずることはあらゆる大きさの人間生活について見られるところのものである。例へば、家庭、隣組、町内、部落、村落等に於て見られるのである。更に廣く國家生活に於ても、人々は自然を共にし政治的支配を共にし經濟生活を共にし言語風俗習慣其他の文化を共にするのみならず更にその國家の運命をも共にして居るが故にこの一つの國家を構成する人々の間には共同感情が生ずる。それは各自がそれに於てあるところの國家を共に愛し各自を同じ國家に屬する成員として相互に愛するところのものである。更に人類世界全體に互る交通が開け、それが經濟其他に於て一體的に結び來るならば、この世界に於てある人々の間にも自ら共同感情が發展し來る。例へば近世の市民社會に於ては各自の日常の衣食住も一國の生産物にのみに依存するものではなく、世界の生産物に依存することゝなつたのである。かくて東西が一體となり世界が一體となつたが故にこの世界に於ける人々の間には人類的な共同感情が次第に發展し來つたのである。

かくの如く情を本質とする人間が生を共にするならばその間に共同感情を生ずると云ふことは、人間の生命の共同體の本質である¹⁾。

次にこれを人間的存在の面より云へば、自覺すると否とに拘らず人間的存在^{人間的存在}は常に共同體的本質を有して居る。即ち人々の生活が一つの生活圏に於て行はれる以上、その間には何等かの意味に於て共同體的關係の事實が存する。例へば一家の中にあるものは、各々が家全體の働きを分擔することによつて家全體の働きを實現し、かくしてこの家に於てある總てのものがその生を完ふして居る。即ち親は親とし子は子とし、夫は夫とし、妻は妻とし、兄は兄とし弟は弟として、家全體の働きを分擔しかくてそれを各自の職分として遂行することによつて家

1) この共同感情の表現として共同體の成立することについては昔述べた、拙著『新體制の指導原理』第三編第一章 共同體の本質と國民共同體の成立。

全體の働きが實現し以て家全體がその總ての成員を生かして行くのである。かくの如く全體が個々を生かし個々が全體に盡すところの共同體的關係は家庭に於て見られるのみならず更に國家に於ても見られる。一國家を成すところのものにあつては、その各々がこの國家全體の發揮すべき働を分擔して以て各自の職分となしこの職分を盡すことによつて國家全體の働きが發揮され、かくて國家に於てある總ての人々が生かされ以てその職分を遂行し得るのである。かくして全體が個々を生かし個々が全體に盡すところの共同體的關係は、この國家に於ても見られるのであるが更に世界が既に一生活圈に結ばれて居る以上は、同様にこゝに見られるのである。これを經濟について見るも、この世界全體の經濟的な働きは各國民の自然、民族、育ちに相應して各國民によつて分擔されて遂行され、かくて全體の經濟的な働きが發揮され、この全體の働きによつてその各々がよく生かされて行くのである。即ちこゝに於ても全體が個々を生かし個々が全體を生かすところの共同體的關係が見られるのである。かくの如く一つの生活圈にあるものは、それが自覺すると否とに拘らず、事實上共同體的關係に於てある。故に、このことを自覺せずして専ら自己の利益を追求して行動するならば、自己がそれに於てある全體の共同體的事實を破ることとなるのである。而してこの利己性並に排他性は、それ等のものが自己の存在の根底をなす自然性に執着する時に起るのである。

即ち個々の人々も以上述べたる諸の共同體もそれぞれ自然的基礎を有する。例へば我は我の身體に於て我の存在の自然的基礎を有して居る。この身體は我の存在の血的な基礎であると共にまた空間的な基礎である。この我が自己の身體性に固着して自分一人の利益を専ら關心しこれを排他的に追求する時、自己がそれに於てある人間の存在の共同體的性格は意識され得ない。かくて全體を無視し自己の利益を専ら追求することは自己が事實上そ

れの働きを分擔するところの全體の働きを害ふことゝなつて全體の働きを低下し以てこの全體に於てあるところの各々の生を低下し、かくして全體の破滅とそれに於てある總ての個々人の死を將來する方向に進み行くことゝなるのである。

このことは一つの家庭に於てある個々人と家庭の全體についても云はれ得るところのものであるが、一國家を構成するところの家庭とこの國家全體についても云はれ得るところのものである。即ち一國家に於ける各家庭はこの國家全體の働きを擔當して居るところのものである。然るにこの各の家庭が自己存立の自然的基礎としての血に把られ、それが於てある全體を忘れて利己的排他的に行動する時、全體の働きは害はれ、このことがそれに於てある各の家庭の働きを害ひ其結果益々全體の働きを低下し、かくしてその全體を死に向はしめることゝなるのである。前述せし階級社會なるものはその一例である。またこれを世界について云ふもそれに於てある總ての國々がその自然的並に民族的基礎に固着してそれが於てある世界全體を忘れて自國の利益のみを専ら追求するならば、世界全體の共同體的構成を傷つけそれに於てある各國の働きを害しこのことは益々全體の働きを損ねることゝなり、世界は全體として死滅に向はざるを得ないことゝなるのである。

而もこれ等諸種の共同體は重層的構造に於てある。即ち世界共同體に於て國家共同體があり、國家共同體に於て家庭共同體がある。故に家庭共同體を害ふならば國家共同體を害なひ更に世界共同體を害ふことゝなる。同様に世界共同體を害ふところのものは國家共同體を害ひやがて家族共同體を害ふことゝなるのである。

然るに前述せし如く人間の生命も人間的存在も本來共同體の本質を有するものである。故に人間の生命が自己がそれに於てある人間的存在の共同體の本質を自覺し自己の共同體の本質を發揮するならばその人間的存在の共

同體的性格は具體的に實現される。即ち自己がその共同體の成員なることを自覺するならば、自己の自然性は今や、自己の、個性的、存在の基礎となり、この個性に基いて、共同體全體の働きを分擔し、その共同體全體を愛し全體の事情を十分に認識し以て職分を遂行する。かくて全體の働きは高まり全體が愈々それに於てある個々を生かす。この共同體的關係は、個人・家庭・國家・世界が重層的關係にあるが故にその間に成立つのである。即ち世界に於てある總ての國が自己を世界共同體の成員として自覺しこの自覺に基き自己の分擔せる職分を遂行するならば、世界全體の働きは高まりこの世界に於てある各國の働きを高めることとなる。かく各國の働きが高まることは、それに於てある家庭其他の共同體の働きを高めることとなる。このことは、國家全體の働きを高めることとなる。かくして國內の共同體の働きを高めることは、結局國家の働きを高めることとなり、各々の國家の働きを高めることは世界共同體の働きを高めることとなる。かくして、全體が個々を生かし個々が全體を生かす關係は、重層的關係に於てある總ての共同體の間に實現し、より大なる共同體の發展は順次により小なる共同體を發展せしめ、より小なる共同體の發展はまた順序により、小なる共同體を發展せしめることとする。かくの如く共同體關係が小は家庭共同體より大は世界共同體に至るまで具體的に實現するとき、かくの如き世界に於てはじめて總ての國家も總ての家庭も總ての個々人も各々の職分を最大に發揮し人類世界全體の働きが最大に發揮され人間の生命の最大の深化と最も高き文化の實現が可能となるのである。

かゝる意味に於て人類はその本質上一全體としての世界共同體を成してゐるのである。故に最も具體的な人生の實現はこの大なる範圍に於ける共同體の具體的實現を待つてはじめて可能となるのである。

五 日本の國是としての世界共同體の實現

現代世界の混亂に對處すべき日本國民の指導原理は既に昭和十五年九月二十七日の詔に於て確立して居る。即ち「今や世局ハ其ノ騷亂底止スル所ヲ知ラズ人類ノ蒙ルベキ禍患亦將ニ測ルベカラザルモノアラントス」と仰せられたこの世界的混亂に對處すべき日本の根本的立場は「萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシム」ることより外ないのである。これは『維新の詔』に於て仰せられた「天下億兆一人モ其處ヲ得ザル」ものなからしむる我國體の精華を世界に敷くことである。

かくて日本の國家の理念は、内に「天下億兆一人モ其處ヲ得ザル」もの無からしむると共に外に「萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シ」むることである。

内に向つて「天下億兆一人モ其處ヲ得ザル」もの無からしむることは、國を「いへ」となすことであり國民共同體の實現である。外に向つて「萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シ」むることは、世界を「いへ」となすことであり世界共同體の實現である。而も既に述べたところより明なるが如くこの内外の共同體の實現は不可分離なものである。故に内に國民共同體を實現したる日本にして世界共同體の實現の實踐主體となり得ると共にこの世界共同體が實現したる時この世界共同體に於て日本の國民共同體は最も具體的となり得るのである。かくて世界共同體の實現と云ふことが即ち現代日本の國是となるのである。

かくて現代の日本學なるものは、日本國體の精華を世界にまで徹底せしめ世界共同體を實現する學でなければならぬ。この日本學が現代世界の混亂を眞に解決し得るものとして現代世界學である。

日本經濟學なるものは經濟に關する日本學である。故に以上日本學一般について述べたことは、そのまゝ日本經濟學に妥當する。このことは改めて論ずることとする。